

## 論文要旨

### 【研究目的】

本研究では、文献レビューにより、化学療法を受けているがん患者に対して認知行動療法(cognitive behavioral therapy:CBT)を用いた介入効果について検討する。

### 【研究方法】

化学療法を受けているがん患者の倦怠感に対して CBT を用いた介入効果について検討するため、PubMed、CINAHL、Cochrane、PsycINFO、医学中央雑誌を用いて検索を行った。そして、選定基準に該当した文献を用いて、目的に沿って内容を抽出し、解釈、統合を行った。

### 【結果】

1. 本研究で、CBT の対象としていた化学療法を受けているがん患者の特徴は、平均年齢が 52-59.1 歳で、PS3 以下、または Karnofsky performance Scale score60 以上の化学療法開始前か、治療中の者であった。対象者の疾患、病期に関しては、研究によって様々であった。
2. 化学療法を受けているがん患者の倦怠感に対する CBT による介入方法(実施期間、頻度、介入の内容など)は、論文によって様々であった
3. 化学療法中の倦怠感に対して CBT を用いた介入は、がん種, Stage, 介入方法に関わらず、治療中の倦怠感が、介入直前と比較して介入直後の倦怠感が有意に低下した。しかし、介入前と比較して介入後の倦怠感に統計的有意差はみられなかった。
4. 化学療法後 1 ヶ月、フォローアップ 4 ヶ月後など化学療法後に測定された倦怠感に対する CBT の効果は、統計的な効果が得られたものとそうでないものがあり、一致しなかった。

### 【考察】

化学療法中の倦怠感に対して CBT を用いた介入効果に影響した要因は、治療サイクルとともに倦怠感が増加すること、研究協力者が戦略を選択し実践する方法、介入で使われた道具を操作するための手技、検出力の低下、リラクゼーション・誘導イメージ療法による戦略が考えられた。次に、化学療法後の倦怠感に影響した要因は、好中球減少症、サンプルの脱落が考えられた。

### 【結論】

本研究では対象論文数が少なく、CBT を用いた介入方法が異なった。化学療法中の倦怠感に対して CBT を用いた介入の効果は得られなかった。また、治療後の倦怠感の効果も、一致した見解が得られなかった。以上より、介入方法とその効果について、一定の見解が得られるように、批判的吟味を重ねながら、データの蓄積を継続していく必要がある。